

## 内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前：森本 友（もりもと とも）
- (2) 年 齢：46 歳
- (3) 参加事業：第 11 回「世界青年の船」事業（1998 年）
- (4) 職 業：世界銀行 上級保健専門官 西部・中央アフリカ地域局



### ■参加のきっかけ

親の転勤に伴い、幼少期をシンガポールで多国籍の子供たちが通うインターナショナルスクールで過ごし（7～10 歳）、高校生の頃は 1 年間ベネズエラへの交換留学へ行くなど、昔から国外に目が向いていました。大学時代にも様々な国際交流活動やイベントに参加していましたが、その中で内閣府の「世界青年の船」事業（以下「世界船」という。）を知りました。将来は日本という枠を超えた、何か国際的な仕事につきたいと漠然と思っていたため、大学を卒業する年に、一つの節目として、この事業へ参加することを決意しました。

おそらく事業に参加した参加青年の中で、事業に対する期待を満たされなかった、もしくは期待を下回ったという人はいないと思います。コミュニケーションスキルやリーダーシップスキルの向上は勿論、普段の生活環境から離れた閉鎖空間で今までの自分の**常識や既成概念を覆される貴重な体験でした**。大学卒業を控えて、まだ夢や希望で生きている年代だけに、こういった「自分自身と向き合う」という経験は、その後の自分の**価値観や考え方に大きな影響を与えた**と思います。

### 大学を卒業する年に参加されたのはなぜですか。

国際交流関連のイベントに参加した時に、世界船について友人から聞きました。大学 4 年で参加したのは、試験がすべて終わっていて、就職先も決まっていた、長い休みがあったからです。卒業旅行感覚でいたことは事実ですが、世界船の趣旨に心から賛同できたので、単に観光目的で海外旅行に行くより、一つの節目として思い出に残る経験ができそうだと感じて参加しました。

### 船上での共同生活を通じて様々な経験をされた中で特に印象的だったことは何ですか。

もちろん楽しかった思い出はつきませんが、20 年経った今こうして振り返ってみると、意外にも乗船した直後に感じた孤独感、「自分には何ができるのだろう」といった焦燥感を思い出します。船上というのは非日常の閉ざされた空間で、周りに家族はおらず、友達ができるまでは一人です。私は留学もしていたし、子供の頃に海外にいたこともあって普通に英語は話せましたが、こういったあまりにも日常生活とは懸け離れた中で、今まで経験したことのないような気持ちの浮沈みもあり、そんな今まで知らなかった「自己」を見つめる貴重な経験だったように思います。

### 常識や既成概念を覆されるどんな経験をしましたか。

世界船には厳しい選考を通過してきた多様な人たちがいました。少数民族の人、一芸に秀でている人、プロフェッショナルとしてある程度成功している人、少なくとも自分に自信があるように見える人たちばかりで、日本では重視されていた学歴というものが意味をなさない世界でした。誰かが口に出して言うわけではありませんが、「**あなたは何かができるのか**」と**絶えず問われ**

ているような空気がありました。自主性を尊重し、一個人としてどんな役割を社会で担っていくべきか、あまり大学生時代はそのようなことを考えていなかったのも、「このままではいけない！」と思ったという意味ではこれまでの常識を覆される経験であったと思います。

また、私は東京出身で、東京で生活していましたので、日本各地から選抜されてきた人たちに会えたのがよかったです。日本の中の多様性に触れることができましたし、「地域」や「コミュニティ」の観点から社会をどう変えていくか、と考える良いきっかけになりました。

#### 価値観や考え方にどんな影響を与えましたか。

私は、高校生という多感な時期に留学した経験もあってか、世界で起こる多様な問題に対し漠然と関心はあったように思います。しかし、そうした事柄に対して、具体的に何か行動を起こすことはありませんでした。世界船に参加して、一個人として自分はどのくらい貢献しているのか、ということについてより強く考え、その目標が具体化したと思います。

また、世界に目を向ける重要性を改めて認識したのも世界船を通じてだったように思います。日本では、ある意味、内を向いて日本の中だけで生きていこうと思えば、そうすることも可能です。ただ、日本のような恵まれた環境で育ち、教育もしっかり受けたので、日本という枠を超えた、世界でもっと通用する人間になりたいという考えが芽生えたのも世界船を通じてだったように思います。

### ■ キャリアパスにプラスになったこと

事業に参加して、キャリアパスにプラスになったことは三つあります。一つ目は、**具体的な問題意識が確立されたこと**です。世界船でのディスカッションやいろいろな国の人との会話を通じて、自分は何に一番関心があり、それをライフワークとしていきたいのかというのがより明確化しました。社会に貢献する方法は人それぞれ、様々であっていいと思います。プロフェッショナルの仕事として、ボランティア活動として、あるいは小さな日常の習慣として、などいろいろな取り組み方があると思います。仕事に行き詰まったり、やり甲斐を見失ったりした時には、よく船のことを思い出します。「そもそもなぜ自分はこの仕事に興味を持ったのか？」「なぜこれを自分のライフワークにすると決めたのか？」という原点に還る場所が世界船だと思います。

二つ目は、**調整能力が向上したこと**です。現在の仕事では、様々な国籍の人からなるチームを率いて、限られた時間で結果を出すことを常に要求されます。その過程で文化の違いから意見の食い違いが起こり、衝突が起こることもあります。そんな中で**最終的には人間として相手をいかに信用できるか、いかに相手から信頼される人間になるか**という人間関係の構築が何よりも大切です。そのためには文化背景や言葉の違う人でも相手の立場にたって、別の角度から物事を見るというのは特に重要なことです。そういった意味で世界船は、密な日常をともに過ごすことによって、どんな相手とでもうまくやっていくライフスキルを身につける良い訓練の場であったと思います。国籍の違う人でも、日本人同士でも通用することだと思います。

三つ目は、**リーダーシップスキル**です。現在にも通じると常に感じるのは、多種多様な人が集まるチームでは、メンバー全員がそれぞれ強みを発揮し、それぞれの得意な分野を生かして貢献するような場を作るのが、**真のリーダーシップ**だといえると思います。船上ではグループ単位での行動が多かったため、チームのメンバーを尊重し、みんなが力を出し合って成果を出す、という良い訓練でした。

#### 特にどんな国際問題に関心がありましたか。

貧困問題です。高校 3 年生の時に南米のベネズエラに留学しました。そこで、貧困によって奪われる権利があることを知りました。いくら能力や才能があっても、生まれ育った家庭環境によっては、その才能を開花できない子供達もいる、また教育や

医療を十分に受けられないことで発達障害があったり、成人しても社会で十分機能できず、貧困の再生産につながったりする、という現状を目の当たりにしました。高校生の時にこのような状況を目にし、ショックを受けたことを覚えています。「貧富の格差」というのは日本人としてあまり身近に感じる問題ではありませんが、自分が日本人として生まれ、いかに恵まれた環境で育ったのかということが分かり始めた時期だったこともあると思います。

### なぜ、この仕事に興味を持ち、ライフワークだと考えたのですか。



現職を始めた当時、コンゴ民主共和国にて現場視察

仕事をするなら、人の役に立つことをしたいと思っていました。現在の仕事は、人の命に直接係る仕事です。政策が失敗すれば、母親や子供たちの将来を大きく左右します。このようなとても大きな課題ですが、その中で一個人として何ができるのか、ある意味自分自身へのチャレンジであったと思います。もう一つは、世界船に参加して強烈な刺激を受け、もっと刺激を受けたいという気持ちが強くなったのも事実です。国際機関の一番の魅力は多国籍、多文化であるため、これが「普通」という概念が存在しません。「言わなくてもわかる」とか、「これが当たり前」ということもありません。こういった固定観念の存在しない環境は、常に新しい発見の連続で、「刺激的」という意味では私の期待を裏切らない職業だと今でも思います。

### 乗船前と乗船後では、交渉力に変化がありましたか。

1 か月のプログラムに参加しただけで交渉力が向上するということでは必ずしもありませんし、今でも私自身まだまだ足りないなど思うこともありますが、**論理的に相手を説得する交渉力の重要性**を学んだのは世界船のおかげです。現在の仕事は、政府を相手に、国の政策に係る提案やアドバイスをしたり、大規模なプロジェクトを様々な利害関係者とともに立ち上げ、運営したりしていかなければなりません。また、多くは紛争国を相手にするため、普通では予期できない様々な問題にぶつかります。そういう中で、政府高官、寄付者、他の開発機関、NGO など様々な立場を代表する人たちが皆納得するようにいかに対話を進めていけるかが試されます。とても難しい決断を迫られることも多々あります。いま思えば、船上でのディスカッションや議論は、論理的かつ説得力を持って相手に伝えることの重要性を学んだ原点でした。また、交渉に加えて、**コミュニケーションの大切さを痛感**しました。ただこちらが一方的に話せばいいのではなくて、相手の言い分を引き出さなければいけません。乗船中の1 か月で、これらのスキル向上への足掛かりとすることができました。

## ■特に影響を受けたプログラム

船上ではいろいろなアクティビティを自分たちのイニシアティブで行うことが重視されるので、リーダーシップや自主性の尊重、受け身ではなく積極的に物事に取り組む姿勢を学ぶ良い経験だったと思います。

世界で起こる様々な問題を、異なるバックグラウンドの参加青年たちと色々な立場から話し合うディスカッションや分科会は、世界情勢やグローバルな問題を新聞やメディアから理解するのは全く違う経験となりました。それまでは「他国で起こる他人の問題」だったことも、身近な友人やキャビン・メートから**生きた経験、切実な問題**として聞くことで、とても身近な問題になりました。地球温暖化をテーマとしたディスカッションで、フィジーやソロモン諸島の青年が、「明日、僕たちの島がなくなるかもしれない」と切々と訴えていたことは、今でも鮮明な記憶として残っています。

## ■ 民間等が主催する事業や留学と内閣府事業が異なる点

まず、**ネットワークの強み**があげられます。共同体験を通じて、世代や期を超えて「世界船」という一つのコミュニティが築かれることです。こういった財産は、目に見える形ですぐに成果が出るわけではありませんが、いざとなったときに底力を発揮するものです。同期生のいたソロモンでの地震や、ほかの参加青年の出身国で起こった問題に対し、**アルムナイネットワーク**を通じていち早く動いた組織力や行動の速さは数値で簡単に測れる成果ではないでしょう。また、私は東南アジアでも仕事をしてきたのですが、「東南アジア青年の船」事業に参加した人が政府関係者の中にけっこういました。「私は世界船に参加したんです！」と言うと、**同じような船の経験をしたということで、相手との距離が縮まり、話がしやすくなりました。**

また、事業の目的が明確であり、参加者の選考プロセスも出身地域やバックグラウンドの多様性を考慮するため、多種多様な人材を集められることもこの事業の強みです。参加国の選考も、偏りなく、宗教・文化・国の発展度など様々な視点から考えられており、各国の代表青年も自国において厳密な選考過程を経てくる者ばかりです。民間や NPO 主催の事業ではこうした選考は困難だと思います。

更に、**次世代につなげていく外交手段**があります。政府によるバックアップがあることで、相手国からの信頼度も上がります。もちろん、民間でもできないことではありませんが、ある意味、重要な国と国のつながりを深めるための**ソフトな外交手段**だと思います。また、**長期的な事業の運営により、世代を超えて、その時代に合った形でのリーダーシップの育成、国際問題の理解を可能にすることができています。**

### 同窓会組織の強化のために何が必要だと思いますか。

既参加青年たちでテーマ毎にプロジェクトを立ち上げたりするなど、組織立った活動を行うと良いのではないのでしょうか。ただ、そのためには、明確な目的が必要です。例えば、地震などの災害が発生した際には、復興を目的としたファンドレイジングを行ったり、森林保全を目的とした植林活動をしたりするといったような、はっきりした目的があると活動しやすいと思います。また、大学生の参加者が多いプログラムですから、いろいろな職業に就いている OBOG が自分の仕事について語るセミナーをもっと開催するのも良いかもしれません。

### 内閣府事業の存在意義は、どのような点にあると思いますか。

**国際社会で活躍することができる人材を育成する場として、内閣府国際交流事業は有用であると考えます。**日本は先進国であり、特に今の世代を生きる青年たちは恵まれた環境で育っていることが多いため、国内情勢、世界情勢に対し、問題意識が希薄になってきていると言っても過言ではないと思います。しかし、世界が変化していくなかで、日本がかつて享受していた過去の競争力はもう通用しません。また英語という言語的なハードルが重なり、国際社会での発言力も残念ながら強いとは言えません。

内閣府事業は、国際社会の中で日本が発言力を強め、世界でリーダーシップを発揮できるような人材を育てる種だと思います。今の若い世代でも、世の中を良くすることに貢献したいけれど、どのように行動したらよいのか分からない、という若者もいるはず。そういった世代の人々に対し、方向性を示す場所を提供する。そういう意味で、内閣府事業は必要であると思います。

## ■ 事業参加の経験が与えた影響

様々な社会問題に対面し取り組むにあたって、**事業参加の経験が生きている**と感じることが多いです。私は事業参加後に、15年ほど発展途上国の開発に携わりましたが、その際、社会の不平等や貧困を目の当たりにする場面が多くありました。世界船への参加は、そのような大きな社会問題に対し、「自分が一個人として何ができるのか」を常に考える良い経験となりました。また国の政策という立場を離れて、コミュニティの力、草の根から生まれる取組の大切さを知ったという意味でも、事業参加の経験が大きく影響していると感じます。



ラオス北部農村にて子供たちの栄養教育にかかわるプロジェクトの現場視察

### どんな場面で事業参加の経験が生きていますか。

職場には、様々な人種や背景を持った人がいるので、予期しなかったことが度々起こります。「こんなことが問題になるんだ」と、毎日驚きの連続です。こうした状況に柔軟に対応しなければいけないという意識と、柔軟に対応できるスキルを身に付けるにあたって、世界船での経験は原点となりました。

## ■ 船内活動

国連関係やグローバルな問題のディスカッションセッションが多々あり、専門性を築き、それを生かして国際機関で働きたいという思いが明確化するきっかけになりました。普段あまりかわりや知識のない分野について学び、船上での生活を通じて語り合うことで自身の興味や問題意識の幅が広がりました。

## ■ 寄港地活動

寄港地活動を振り返って印象に残っているのは、キャビン・メイトやグループメイトの自宅を訪問したりするなど、彼らのバックグラウンドや育った環境を実際に目で見て知るといった経験をしたことです。「百聞は一見に如かず」ではありませんが、肌で感じ、理解することは大切だと思います。可能な限り寄港地活動の時間を増やし、例えばいろいろな施設を訪問したり、現地青年との交流の場をも増やしたりするなど、現地でしかできない社会見学的なアクティビティをもっと取り入れてもいいと思います。

## ■ 船を用いた国際交流の意義とは

船上という逃げ場のない空間で、長期にわたり生活を共にすると、いろいろな人間関係やドラマが繰り広げられます。特に、表面的な人間関係・交友関係が当たり前になっている現在のインターネット社会では、生身の人間と人間との関わり合いがこれまで以上に重要な意義を持ちます。どんな大義名分があっても、結局は、雄大な星空を眺めながらの何気ない会話など、生活を通じて深める、**宗教・国籍・立場を超えた親交によって、世界の問題が身近になり、それが真の意味での国際理解につながる**と思います。

## ■ 事後活動について

職業柄、持続可能な開発、貧困、宗教的自由、政治的自由、平和と紛争などは常に身近にあるテーマであり、仕事を通じて社会に還元するようにしています。私の専門分野である、母子保健、発展途上国の保健システムの向上、紛争後の保健システムの再構築といった、直接人の命や人間としての尊厳に係わる仕事を通じて、人的資本「ヒューマンキャピタル」の大切さを発信するよう心掛けています。

## ■ 事業参加時の国際的・地域的な人的交流



SWY 乗船 20 周年を記念して、当時住んでいたフィリピンにて世界船仲間が集合

**世界船時代に築いた友情は一生の宝物**です。当時の仲間は今世界のいろいろなところに散っていますが、20 年経った今でも深い交流があり、人生の分岐点、キャリアの悩みなど今でも何かあれば真っ先に相談し合える仲間です。閉ざされた空間で日常を離れ、一人の人間同士が自分自身の強みも弱みも露呈し、時にはぶつかり、納得いくまで語り合った友情は、普通の大学生活や社会人生活ではなかなか得られないものです。そういった友情が生活、仕事でチャレンジできる原動力であり、軸になっています。

### 森本友氏プロフィール

世界銀行上級保健専門官。青山学院大学法学部卒、米国ジョンズホプキンス大学国際関係論修士（国際開発学専攻）、ロンドン大学衛生熱帯医学大学院（London School of Hygiene & Tropical Medicine）にて公衆衛生学修士取得。1999 年、日本貿易振興機構（ジェトロ）勤務を経て修士取得後、2005 年、国連ジュニアプロフェッショナルオフィサーとしてジュネーブの国際貿易センターにて勤務。2007 年に世界銀行入行。以来アフリカ局（コンゴ民主共和国、ブルンジ、スーダン等）、東南アジア局（ラオス、ミャンマー、カンボジア等）にて発展途上国の保健医療システム改革、エボラやコロナ緊急支援対策に従事。2021 年現在は、アフリカ局に戻り、保健チームリーダーとして、中央アフリカ共和国における紛争後の保健医療システムの再構築、母子保健、栄養支援等に取り組む。コロナ下の現在は、夫の母国であるスウェーデンに家族で在住。